

## 教師にとって生徒にとって教科書・教材とは



杉本 豊久（成城大学助教授）

「不慣れな外国語を使っている最中は、その外国語を使うのが難しいだけでなく、思考力も一時的に低下する」これは、ある学会での発表内容の一部です。発表者はこの現象を「外国語効果」と呼びました。英語の授業中に、まるで「おじぎ草」のように下を向いて反応しない生徒たちと接したことがある先生方ならば、この「外国語効果」の存在を疑わないでしょう。ある大会社の元会長さんも、「私は重要な国際会議では決して英語を使いません。優秀な通訳を雇います。そうしないと会議中に(思考力が低下して)自分の考えがまとまらず、意図したことをうまく表現できないことがあるからです」ということを述べられています。また、英国滞在中に私のパートナーが自動車の運転免許を取ろうとしたときのこと。路上で運転の練習をしながら、隣にいるインストラクターの指示や解説はかろうじてわかるものの、運転と英語で頭がパニック状態になり、英語の返答ができなくて困ったと言っていました。外国語を学んだことのある人ならば、みなさんこれに似た体験をされたことがあるでしょう。この発表者も大学時代に合衆国へ留学し、英語のネイティブ・スピーカーたちとのコミュニケーションにおいてみじめな思いをしたことが研究の発端となっていたようです。

さて、言語活動というのは、言語処理(音声や統語の解析、文の生成や発声など)と思考(相手の発言内容の分析や意図の推測、自分の発言内容の案出や点検など)とを同時に行う活動といえます。母語話者はこれを比較的上手にこなせるのですが、外国語学習者はこのふたつの活動が干渉し合い、「外国語効果」に悩まされます。つまり、外国語の言語処理能力が未熟なために、そちらに振りまわされて思考活動がおろそかになるというわけです。そのような状態にある学習者、つまり生徒たちにとって望ましい授業を実現させるための教科書・教材とはどんなものでしょうか。言語処理、思考というふたつの活動のどちらかに手を加える必要があります。言語処理をしやすくするためには、たとえば「文型・文法や新語数の精選」をして「基礎・基本の徹底」を図るという方法があります。また、生徒の視点に立った(身近な)場面設定を心がけ、現実味のあるやさしい言語活動を教材に盛り込むことにより、思考力の向上を目指すことも可能でしょう。一方、思考活動を活性化するための努力も必要です。環境・戦争と平和・人権(共生)など中学生の知的レベルに合った題材内容を厳選すること。彼らに感動や驚き、喜びや悲しみを体験させてくれるような題材を教材に盛り込み、彼らの思考力を大いに刺激する。これらがまさに「外国語効果」を克服する道につながるのです。

## 英語教育の根本とは何か(2)

基礎・基本と NEW CROWN

森住 衛

(大阪大学教授)

### 1. はじめに

世はまさに激動の時代である。英語教育関係だけをとってもめまぐるしく動いている。昨年の秋あたりからの伝聞によると、文部省は今回の学習指導要領は5年後には見直すという。毎年見直していくという報道もなされた。まだ実施もしていないのに、今から見直しの段階に入っているとは、どうなっているのだろうか。このように考えていた矢先の本年に入って、読売新聞(1/5朝刊)に「ゆとり」を取り下げるとい記事が出た。基礎学力が低下しているために習熟度クラスを設けて「伸びる」子どもはもっと伸ばさなければいけない、私立の小・中・高入試の「難問」もある程度は認めるとい。指導要領は最低線だともい。確かに、中学校の英語教育で扱う言語材料や言語活動はどれをとっても重要である。しかし、2002年から再びはじまる「週3時間」ですべての子どもたちに指導要領の内容を教えるのは至難である。このような状況にあって、本稿では、とりわけ重要なものは何か、あるいは何か欠落してはいないか、といういわば「基礎・基本」を考えていくが、これまで本誌の拙論で言及したこととの若干の重なりがあることを容赦願いたい。

### 2. 言語材料の基礎・基本

一般に、言語材料に関する「知識」は音、文字、語彙、文法、表現の5つの諸相に分かれる。これを知らないと、ことがはじまらない。どれもが必要であるが、特に危うくなっていると思われるのは語彙と文法である。

語彙は周知のように新指導要領では900語になるが、インプットの分量としては少なすぎる。なぜならば、インプットされたものがすべて覚えられないことはないし、覚えられたとしたら、これは子どもたちの特性にどの程度対応しているかという点で、危ういからである。新しい教科書の本文

では900語程度に制限しているが、付録や先生方の自主プリントでこの2倍、3倍の語彙を導入してもらいたい。冒頭に述べたように、指導要領は最低線なのである。当然ながら、これら全部を覚えたり使えたりすることはない。生徒一人ひとりの特性に応じて必要なものが残っていくはずである。このうちどの生徒にも覚えてほしいと思われる語、つまり、900語の中の何が最重要かということについては、現行の学習指導要領の507語のうち機能語を含む400語から450語くらいとなる。新しいNEW CROWNではこの目安を出す予定である。

文法(ここでは文型も含む広義)も、学校教育で生徒に保証してやらなければならない基礎・基本である。会話表現などは他の機会、たとえば、会話学校やホームステイでも習得できる。この15~16年間、文法がやや軽視される傾向にあるが、内容のある発話や文章を聞いたり言ったり、読んだり書いたりするには、文法は欠かせない。この趣旨のもとにNEW CROWNでは伝統的に<文法のまとめ>を設けてきた。しかし、困ったことがある。2002年度から「週3」になるのに、扱う文法の分量は現行と比べて微減なのである。そこで、その中でも基礎・基本は何かとなるが、答えは語順ではなかろうか。語順は、日英語の仕組みの相違という点からも、実際のコミュニケーションという点からも、非常に重要だからである。冠詞とか単複の呼応などは、使用の際に間違いがあったとしても、語順と比べると被害が少ないともいえる。

最後に、言語材料全体にかかわる2点について触れておきたい。まず、音、文字、語、文法、表現など言語材料を扱う「姿勢」についてである。英語教育をはじめとすることばの教育ではともすると生徒の「なぜ」を軽視する傾向がある。しかし、本来、学校教育は世の中に対する子どもたちの「なぜ」に答える場でなければならない。英語の「なぜ」

は、なぜ A や D の小文字が A や d なのか、なぜ night が [nait] なのか、なぜ chalk が「数えられない」のか、なぜ SVO なのか、なぜ So long. が「さようなら」なのか等々無数にある。これらのすべてに明解に答えられるわけではないが、質問を積極的に取り上げ、生徒と一緒に考えてみたい。言語に対する興味・関心を喚起するだけでなく、教育の重要な側面である「わかる」ということにも接近できるからである。もうひとつは、言語材料の定着のための「学習活動」についてである。「コミュニケーション」が人口に膾炙かいしやされるようになってから忘れられがちな活動に「朗読・模写・暗唱」がある。この3つは「コミュニケーション」でないと言われるからであるが、ことばの学習の基礎・基本である。問題なのは、教科書本文などがこの3つに耐え得るかどうか、ということであるが、NEW CROWN はこの点でも、力を注いでいるつもりである。

### 3. 言語活動の基礎・基本

言語活動のうち Listening・Speaking に関係する英語の「音」については、基礎・基本として、とりあえず RP (Received Pronunciation) ないしは GAP (General American Pronunciation) である。「とりあえず」としたのは、英語圏の人たちすべてがこの発音を使っているわけではないからである。たとえば、RP を話す人は英国では人口の3パーセント以下だといわれているが、さりとて、他のパリエーションのどれをとっても同じことである。留意すべきは、RP や GAP が唯一正しい英語の発音だなどは教えないこと、そして、英語圏に行った場合、RP や GAP 以外の英語を聞く機会が多いが、その時落胆などしないでいいということを生徒に伝えておくことである。

「音」のどの部分が基礎・基本になるだろうか。音指導は大別すると3つに分かれる。まず、[I] とか [T] とかの個々の音の指導、次に、語のアクセントなど「かぶせ音素」の指導、そして、綴りと音の結びつきの指導である。この3つを重要度の順で並べると、挙げてきた逆の順になる。すなわち、綴りと音の結びつきが最も大切で、次にアクセント、最後に個々の音である。beautiful という語はまず「ビューチフル」のように言えるということが先決で、次にこれに「ビューチフル」とアクセント

をつけられること、そして最後に [bjũ:t@fl] と個々の音も発音できることとなる。最初の beau- [bju:] ビュー [f] [t] フ ] [l] [l] であることがわからないために、途中でつまってしまう生徒がなんと多いだろうか。これができて、あとはアクセントがつけば、Communicability はさらに増す。そして、次に個々の正しい音ということになる。この「正しい」音が最後なのは、Englishes と複数形が使われる時代にあって、それぞれの母語に応じたものが許容されるようになってきているからである。この種のパリエーションを理解できない英語母語話者は「非国際的」とも言われている。重要度は前のふたつに比べると落ちる。

Reading・Writing はこれまでも増して重要になる。特に、Reading は他の技能の支えという点で、そして、今の日本の学習環境を考慮するとという点で、4つの技能の中では最重要である。インターネットを駆使する時代でも、やりとりの主流は Reading である。その際、一つひとつの文が理解できることよりも、全体としての大意をとること、求める情報を読みとる Scanning (走り読み) や Skimming (拾い読み) の力が必要になってくる。教科書本課本文や LET'S READ の Q&A はこのために用意されているが、教師用指導書なども利用して、この活動が基礎・基本になってしかるべきであろう。Writing も重要である。発信型コミュニケーションとして Speaking の基礎にもなるし、e-mail など近年の必要度は以前よりも高まっている。本来の議論としても、母語習得や第2言語習得の環境では音声主導が適しているが、外国語教育としては文字主導が適している。新指導要領の総目標では「聞く・話すなど実践的なコミュニケーションの基礎を養う」ということで、「読む・書く」は第二義的な扱いになっているように受け取られがちであるが、この技能は現在より下げてはならない。

4つの技能全般にまたがるものとして Thinking の活動に言及したい。Thinking は交換されるメッセージすなわち題材によって触発される。新指導要領では「実践的コミュニケーション」が謳われ、その具体例として「買い物の仕方」や「電話での応対」が出ている。場面や働きの項目を整理して出してくれているのはありがたいが、これらが言語活動の目標の基礎・基本であるとしてはならないだろ



う。コミュニケーションの本質は、発する側の自己の発露、受ける側の心の打ち震えである。毎回の授業でこのようなことは期待できないにしても、コミュニケーションの根本として忘れたくないものである。そのためには、言語活動で取り上げる題材が重要であるが、これについては前号でも触れているので割愛する。一言だけつけ加えておきたいのは、言語はそれ自体精神そのものなので、言語教育は水泳やパソコンの技術を教えることとは異なるということである。

#### 4. 言語観の基礎・基本

言語材料や言語活動は目に見えるが、見えにくいものがある。英語やことば全体をいかにとらえるかの観点、すなわち言語観である。本誌 42 号でも触れたが、言語観は次のようなことに対して Yes か No かの答えに関係している。

- ・ある国や地域に行ったら、あいさつぐらいはその国や地域のことばを使う。
- ・国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである。
- ・少数民族のことばは滅亡してもやむを得ない。
- ・ことばの学習は役に立たなければ意味がない。
- ・ことばについて考えない人は、人間について考えない人である。
- ・<ことばの教育 = スキルの習熟> である。
- ・<ことばの教育 = 人間教育> である。
- ・英語が話せるということは「国際人」である。
- ・日本でも英語を「第 2 公用語」にしたほうが国際通用力が増す。
- ・日本式英語を堂々と押し進めるべきである。
- ・外国人が法廷に立つようなことがあれば、その母語使用を保証すべきである。

この例でもわかるように、言語観は、言語材料の知識(知る)や言語活動の技能(使う)に対して、観点(判断する)領域に関するものである。NEW CROWN では、この言語観に関わる問題を題材や教科書構成、文法の扱いに至るまで教科書に打ち出してきた。前号で取り上げた英語の中の日本人の姓名の順序などはこの最たる例である。見返しの「世界の言語 いろいろな」こんにち

は」> も英語以外の言語に関心をもつという言語観に関係する。NEW CROWN が伝統的に取り上げてきた登場人物の配置も然りである。題材では 1 年 7 課の English and Japanese は学び合いである。母語を大切にするという点から 2 年 8 課の Ainu, 9 課の The United Kingdom, 11 課の Kenya などを取り上げている。3 年の 3 課の Korea, LET'S READ 3 の Language Life of a People などこの種の言語観を取り上げた教材である。言語観は「判断する」問題なので、どちらがよいかは個人によって分かれる。この種のことも取り上げて、生徒と一緒に考えておきたい。そうすれば、学校教育の自立性を保証することにもなる。英会話教室やホームステイでは、取り上げられることが少ないし、あるいは無意識に偏った形で取り上げられているからである。

#### 5. おわりに

冒頭で正月の新聞報道を取り上げたが、もうひとつ筆者にとって衝撃的な報道があった。元旦の朝日新聞の第 1 面の記事である。IT 革命の一環に翻訳・通訳の機器の発展があるが「木々の紅葉がきれいですね。なんとという木ですか」「カエデです。もうすぐ葉も落ちるでしょう」などの類の音声認識翻訳は、8 年前は 40 秒かかっていたが、今では 1 秒だそうだ。現在の自動翻訳の技術は、平均の大学生の英会話能力とほぼ同じであるともいう。となると、学校教育でやっていることはどうなるのだろうか。さらに、この種の機器の開発をしている ATR 音声通信言語研究所の所長は「21 世紀は、英語が世界を制圧するか、それとも我々の技術が英語を蹴散らすかである」とも言っている。日英の自動翻訳が進めば、日独、日中など他の言語にも応用は簡単である。英語教育のレーゾン・デートルはどうなるか。

言語教育政策の変転やこの種の機器の発達にも耐えうる英語教育の基礎・基本すなわち英語教育の根本は何になるだろうか。英語を単に「道具」として取り上げるのではなく、異言語の一例としてとらえ「ことばの教育とは何か」を模索しない限りこの答えは出ない。NEW CROWN はこのことを常に考えてきた教科書である。

## 特集「英語教育はどうあるべきか」 Part 2

# 「<読む・書く>コミュニケーション能力」の育成

高梨 庸雄

(弘前大学教授)

### 1. はじめに

新学習指導要領で「書きことば」にかかわる Reading と Writing の目標は、4 技能の目標すべてに共通の「慣れ親しむ」と「初歩的な英語」を除くと、「書き手の意向などを理解できる」と「自分の考えなどを書くことができる」とである。換言すれば、書きことばにおける双方向コミュニケーションである。もっとも、Reading では書き手と直接コミュニケーションできる場合はまれで、間接的なものにならざるをえない。教育的にはそこに open-ended questions で授業を展開できるおもしろみがある。

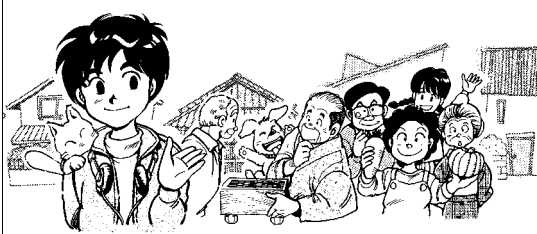
### 2. リーディング - トップダウンとボトムアップの併用 -

新学習指導要領の言語活動に「物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取ること」がある。教科書の文を一語一語逐語訳で意味をとっていく bottom-up の方法では「あらすじ」や「大切な部分」がなかなか見えてこない。森の中で樹木を一本ずつ見て歩いたのでは、森の全体像は見えてこない。へたをすると樹海の中で方向を見失うことにもなりかねない。

しかし top-down の読み方を中学 1 年生にいきなり指導するのは無理である。2、3 年生になっても英語力の低い生徒には難しい。bottom-up の読み方も十分にできない生徒に top-down を強いるのは無謀である。一般にかなり英語力のすぐれた人でも、文章の内容や難易度によっては top-down と bottom-up を併用しているのが普通である。英語力によってその比率が異なるだけである。bottom-up を悪者扱いにして top-down だけをお題目のように唱えるのは生徒の実態に即した指導とはいえない。むしろ bottom-up の指導からどのようにして top-down の指導に近づけるかを工夫することが大切である。NEW CROWN 1 年 7 課セクション 1 を見ながらその方法を考えてみよう。

ここで繰り返し使われている単語は Sundays であ

**LESSON 10** **On Sundays**  
Ken の家族はそれぞれみんな楽しい日曜日を過ごしているようです。今日はトムも遊びに来るようになってます。



□ What do you do on Sundays?  
My family enjoys Sundays. I listen to music. Sometimes I swim with my friends.  
My father often cooks on Sundays. He is in the kitchen now. He is making bread for us.  
Look at my grandfather.  
He is playing *shogi* with his friend.

1. Does Ken sometimes swim on Sundays?  
2. Who cooks on Sundays?  
He *plays* tennis every day.  
He **is playing** tennis now.  
listen kitchen make bread us

sixty-nine ● 69

Book 1, LESSON 10 1

る。この課の表題が On Sundays であり、このセクションの主題に関連する語が Sundays だからである。このようにひとつのセクションに数回出てくる語句(まったく同じ場合も 代名詞や同意語の場合もある)は、その文章で重要なものであるから、生徒には同じ内容を表している語句に注意させることが、top-down 読みを指導する第一歩である。冒頭の文は読者(生徒)の興味・関心を引くためのもので、スピーチでもよく使われる attention-getting である。2 番目の文が主題文(topic sentence)で、その後続く 7 つの文は、主題の具体的な内容を述べている。Ken に関しては 2 文、Ken の父については 3 文、祖父については 2 文を使って、日曜日の楽しみ方を描いている。つまり Ken、父、祖父に関する文は主題文の話題

(topic)を発展させたものであるから、My family enjoys Sundays. という文を屋根にたとえれば、その後続く文は屋根を支える柱のようなものである。支持文(Supporting sentences)といわれるのはそのためである。個々の文の中で意味を理解する作業がbottom-upであり、段落全体の中で、主題文と支持文の関係を読みとる作業がtop-downである。

### 3. ライティング - 指導プロセスの柔軟性を -

従来、4技能の指導順序はL(listening) S(speaking) R(reading) W(writing)という図式である。これは新出言語材料については正しいが、授業がL S R Wという固定観念にしばられて、Writingの指導がいつも後手に回り、結果的に、授業で導入された文型・文法練習の単なる補強に終わっていることが多い。語学教育においては便宜上4技能に分けて考えられることが多いが、4技能が共有している要素もかなりあるのだから、授業においても複数の技能が相互補完の関係になるようにすることが大切である。その方法を考えてみよう。

Do you know anything about Wales? It is in the west of Great Britain. The people there love singing. The song they love the best is "Land of My Fathers". It is a song about their history and their language.

(Book 3, p.80)


これは第3学年 LET'S READ の導入の段落である。波線を施した語句は内容上同じもの(Wales)であり、各文をトピックのWalesに結びつける重要な役割をになっている。そのつながりを中心に要約するとWales is in the west of Great Britain and its people love singing, especially "Land of My Fathers".となる。

前節で述べたように、1つの段落で複数回出てくる語句は内容上重要なものである。英文を暗唱させる場合、ただやみくもに反復練習させるのではなく、段落の流れ(discourse)の中で重要な語句を意識させながら暗唱させるのである。たとえば、教科書を閉じておいて、板書あるいはOHPで投影した重要語句を見ながら教科書の文を再生する訓練をする。こうすると、その重要語句がそれを含む文全体を想起するときの足がかりになる。

この練習を最初に試みる時には、教科書の文章をTPシートにコピーして、奇数行の文は最初の2,3

**LET'S READ 3**  
**Language**  
 — Life of a People



ウェールズ民族は英国を構成している民族の一つですが、現在その人口のおよそ19%しかウェールズ語を話すことができません。なぜそのようになったのか、民族にとって「ことば」とは何なのか、考えてみましょう。



Do you know anything about Wales? It is in the west of Great Britain. The people there love singing. The song they love the best is "Land of My Fathers". It is a song about their history and their language.

When some pubs close at night, people begin to sing "Land of My Fathers". They never forget their unhappy history.

1. ウェールズはどこにありますか。  
 2. ウェールズの人たちが好んで歌う"Land of My Fathers"は何についての歌ですか。

	west	西	pub	パブ	unhappy	不幸な
	[west]		[pʌb]		[ʌnhəpi]	

80 • eighty

Book 3, LET'S READ 3

語、偶数行の文は最後の2,3語が見えるようなマスキング(TPシートの語句を部分的に被うもの)をやって、1文の中で残す語句を比較的多めにしたほうがよい。

### 4. リーディングから他の技能へ

前節で述べたような方法で、文章中の重要語句がどんな順序で出てくるのか、お互いにどんなつながり方をしているのかに生徒が気づくように指導する。各文の重要語句から文全体を想起することに慣れ親しむ過程で、スピーチはただ丸暗記するものではなく、重要語句をメモ代わりにして、顔を聴衆に向けて行うものであることを学ばせたい。英文を繰り返し読むことが英語習得に役立つことは、最近いくつかの研究で指摘されており、言語習得における朗読の重要性に新たな関心が寄せられている。しかし中学生に「ただひたすら読め」と言っても指導したことにはならない。授業の中で、教科書の文章を例に重要語句が何かを問いかけながら理解させ、それらが文の中で強勢を受けることを気づかせ、重要語句を手がかりに文を想起しながら、自分でスピーチ

しているように読む指導をすることが大切である。

多少改まった場でのスピーチでメモを持って話すのは決して悪いことではない。スピーチ原稿をただ読むよりも、はるかにスピーチの作法にかなっている。メモなしで流暢にできる人もいるが、そういう人も修行時代には上に記したような方法も活用しながら地道に努力したのだということを忘れないでいただきたい。

### 5. ライティングにおけるイメージ・マッピング

Book 3 の LET'S WRITE 2 は修学旅行がテーマである。教科書の例は、いわば「型」であって、その型をもとに練習して文章の構成法を学ぶのである。「学ぶ」過程に「真似る」段階が入ってくるのは自然なことである。しかし「型」は所詮「型」であって自分の文章ではない。モデル文を部分的に少しずつ変えたり置き換えたりしながら、自分の考えを入れていくのである。LET'S WRITE はそのプロセスに基づき、教科書の見開き 2 ページにわたって展開している。

修学旅行は学校によってコ - スの取り方が違って

くる。したがって「修学旅行の記録」も学校によって少しずつ違うであろう。生徒に修学旅行についてどんなことを書きたいかいろいろ意見を出させる(ブレン・ストーミング)。グループ学習でやるなら各班に和英辞典を貸与し教室に常備しているのが理想)生徒が使いたい単語を調べさせたり、教師が手助けしてやったりして、自分たちが書く(描く)イメージを膨らませていくイメージ・マッピング(最近では Webbing ともいう)が効果的である。

最近の児童・生徒は、自主性に欠けると指摘されることが多いので、生徒自らが考え、感じたことを書かせるためにも、上記のように生徒が主体的に取り組むような学習形態を工夫したい。

**LET'S WRITE**

**2**


**修学旅行**

修学旅行の思い出をもとに英語の新聞を作ってみよう。


**Step 1**

下のモデル文にはどんなことが書いてありますか。まず絵を参考にして考えてみよう。


①どこへ行きましたか?



②見学場所はどこですか?



③感想・印象は?




3-A TIMES

Thursday, July 3, 1997 Terada Akiko

School Trip To Kyoto

① We went to Kyoto on our school trip.  
Ken, Yumiko, Hiroshi and Emi were in my group.  
We had a very good time on the trip.

② On the first day we went to Kinkakuji Temple. Kinkakuji was built by Ashikaga Yoshimitsu in 1397. ③ It looked bright in the sun.




**Times** タイムズ(新聞の名前)  
[taɪmz]

**temple** 寺  
[ˈtɛmpəl]

**bright** カがやいて  
[braɪt]

**have a good time** 楽しいときを過ごす

34 ● thirty-four



thirty-five ● 35

関連表現 ..... Words & Expressions

① 自分たちの修学旅行の行き先 \_\_\_\_\_

② ~ Newspaper Office ~ 新聞社    ~ TV Station ~ テレビ(放送)局  
~ Baseball Stadium ~ 野球場    ~ Art Museum ~ 美術館

③ Everyone looked busy in that office. その会社ではみんな忙しそうでした。  
The stadium was big and full of people. スタジアムは大きく、人がいっぱいでした。  
I saw many works of art. They were impressive.  
多くの作品を見ました。それらは印象的でした。

**【その他の表現】**  
go to Kyoto on the Shinkansen 新幹線で京都に行く  
sightseeing bus 観光バス  
We were free in the afternoon. 午後は自由行動でした。

**Step 2**

モデル文の  の部分を、上の「関連表現」を参考にして、自分のことかえて書いてみよう。

① \_\_\_\_\_

② \_\_\_\_\_

③ \_\_\_\_\_

**④ プラス・アルファ**

モデル文全体を、上の「関連表現」も参考にして、自分のことかえて書いてみよう。

## 特集 「英語教育はどうあるべきか」 Part 2

# 言語材料の内容とその取り上げ方

あなたの授業のパターンは何ですか？

見上 晃

(東洋女子短期大学教授)

### 1. はじめに

授業について話をする機会があっても、「あなたの授業のパターンは？」と聞かれて、すぐに答えられる人は少ないだろう。これに即答できる人は何か特定の教授法を信奉されている方ではないだろうか。たいてい「自己流ですが導入はオーラルで…」のように説明してくれる。当然、学習者のレベルや興味は先生ごとに異なる。つまり、先生ごとにまたクラスごとに授業の形があるということである。

このような自分流の授業パターンをお持ちの先生方にとって、教科書がある特定の授業パターンを押しつけるものになっていると不都合であろう。NEW CROWNの教科書作りは、このことを頭に置いて行われた。したがって、本課にはある教え方しかできないといった内容は置かないことにした。特定の授業パターンを押しつけないというのは大事なことで、先生方が授業研究を行い、ご自分の授業をより良いものにしていく努力を妨げないということにもつながると思う。

### 2. 基本的な考え方

ある人に言語材料の配列がナチュラルオーダーになっていないと言われたことがある。私にナチュラルオーダーハイポセシスについて質問した人は、学習者が自然に学習する順(ナチュラルオーダー)に教えるのがよいと言っていたが、私の理解では、ナチュラルオーダーハイポセシスとは「教える順序がどうであっても、学習者は一定の順に学習していく」というものである。つまり、教える順序はどのようでもよいと理解している。そこで、学習者にとって理解しやすいと思われる言語材料の配列順序を考えた。易しいものから難しいものへと並べるのは当たり前だが、何が基本で何が易しいかの判断がなかなか難しい。具体的な配列は、学習の容易さと指導の容易さを重んじる観点か

ら、現場の先生方のご意見をお聞きしながら編集委員会で決定してきた。

さらに、コミュニケーション能力の基本を理解してもらうためには多少の遠回りがあっても仕方がないと考えた。たとえば短縮形については、コミュニケーション活動を行う場合に自然と身につくものとは考えるが、まずは縮約させない形をきちんと教えて、理解が行き届いたところで短縮形を提示することにした。短縮形そのものは特に用いる必要はなく、英語をある程度の速度で発話していけば、英語のリズムが身につく、その結果として短縮形は身につく。無理に遅いスピードで短縮形を発話するようなことにならないよう、また Yes, I'm. といった誤用が行われないよう配慮した。

### 3. 言語材料の扱い

#### 教科書構成

NEW CROWNでは、言語材料の扱いは二重構造になっている。本課本文(LESSON/LET'S READ)で基本となる文法項目を学習し、LET'S シリーズ(LET'S TALK/LET'S LISTEN/LET'S WRITE)でこれらを活用・応用する。LET'S シリーズは4技能のそれぞれを集中的に練習し、言語学習だけでなく、言語習得に結びつくように配慮した。このことで、十分な時間がない場合には、本課本文だけを学習すればよいという学習方法をとれるようになった。また本課本文では、会話が行われる状況がわかりやすいように、できる限り説明や補助的な画像教材を付けるように配慮した。

教科書のページでは、どのような順で学習してもよいように、言語材料のポイントはページ下部の脚注に置いた。提示する例文は、本文中の文を用いたが、その文が難しいと考えられる場合には別の文を準備して、説明が容易になるような配慮をした。説明は、必ず既習の事項との対比で、どこが新しいかを示すようにした。説明の中では、



既習の単語のみ用いるようにしている。また、学習の便を図るため、各セクションのポイントのほかに巻末には「文法のまとめ」を準備してある。この「文法のまとめ」は、学期の途中でのまとめとしても使えるし、各授業の補助としても用いることができる。例文も、本課本文と同じにはしなかった。自習用としても使えるように、説明を加え簡単な問いも用意した。また、必ずしもここをやる必要がないことを示すため、「文法のまとめ」からは本課本文のページがわかるようにはなっているが、本課本文には「文法のまとめ」のページを入れないようにした。文法については、コミュニケーションが学習の中心となってから軽視されている感があるが、日本人学習者が英語で考える手がかりを持たない場合には、ひとつの拠り所となる。NEW CROWNはこの文法の大切さを考え、ていねいに提示し学習が容易になるよう配慮した。

#### 配慮した事項

細かい点だが、教育的に配慮したことがいくつかある。まず、動詞の導入はbe動詞で行った。実際の教室内の活動で、This is ~. / Is that ~. / What is this? など、身近な例を使うのにbe動詞のほうがいろいろな例を出せるからである。一般動詞だと、ひとつの動詞の意味が特定の動作などに限られる。また、現在形から入るため1人称や2人称を使った発話が、一般動詞では使いにくいということもある。なお、一般動詞の導入があまり遅くなるのはよくないので、4課ですぐにhave, likeなどを導入している。

#### <コンマとピリオド>

一般的にアメリカ英語では、MrやMrsの後にピリオド、tooやeitherの前にコンマを打つが、イギリス英語では、いずれも省略されることがある。また、いずれも新聞・雑誌においては紙面節約のために省略されることがある。NEW CROWNでは学習者の負担軽減と学びやすさの観点から、これらを省略する表記を選択した。MrやMrsのあとにピリオドがつくがMissにはつかないので、学習者には覚えにくい。tooやeitherの前のコンマも、ほかの副詞との違いは何かなど複雑になる。以前にイギリス人の先生とこの話をしたとき、「そのやり方は私と同じだ」と言われたことがある。個人差で使い方が異なる程度のものを無理

に強要することはない。どちらでもよいことについては、できるだけ簡単なほうを選択し、学びやすいものにした。

#### <フォニックス>

フォニックスも部分的に採用したが、本来フォニックスは、英語を母国語とする学習者に綴りのルールを教えるものである。発音そのものが身についていない日本人学習者が、必要なものを学習の進度に応じて学習できるように、最初にすべてを配置することはやめた。すべてのルールを同時に教えることは、学習者に過大な負担になり、ルールを記憶することに集中して、実際の発音が身につかないようでは困るからである。

#### <過去形>

過去形の導入についても少し無駄をした。1年の最後で規則変化の動詞を、2年の最初に不規則変化の動詞を導入した。このことにより、2年の1課で復習をして、さらに不規則変化へと移ることができる。実質的に、3つの課を使って過去形について学習しているので贅沢な配置といえる。

#### <不定詞>

不定詞は副詞用法から導入した。既習の前置詞toの意味に関係づけることにより、理解しやすいと考えたのである。toの原義は「方向・到達点・目的」に関するもので、前置詞toの表す意味と同じである。この意味は、不定詞の目的用法の中に隠れていると考えられるため、ここから導入したほうが学習者も自然に理解しやすいと考えた。

#### <受け身>

前版(平成5年度版)で、教科書での導入の時期が早すぎるとご指摘をいただいた受け身は、現行版(平成9年度版)からは、過去形の不規則変化型の導入から離れて、前版より遅い位置に配置した。このことにより学習者の負担は軽減したものと考える。また不規則変化をする動詞のほうが、過去分詞をはっきり意識でき、過去形と誤解をしないと考え、導入の動詞は不規則変化型の過去分詞を用いた。また受け身では、「視点をかえている」ことを強調するため、byのない形を最初に出すようにした。能動形と同じ意味の文ではなく、視点が変わることを表現した別の文と位置づけている。受け身形が選ばれるのは、行為者よりも行為を受ける対象に視点や情報価値があり、行為者は

不明や問題にしない場合が多い。したがって、通常の受け身はbyのない形といって過言ではない。  
<現在完了>

現在完了は継続用法から導入している。現在完了は特定の時制を表すものではなく、過去から現在までの時制のつながりを現在の視点から見ている、という現在完了の本質を理解するには、過去からはじまり、現在も続いているという継続用法が最も適切と考えた。継続・完了・経験をあまりに明確に区別することは本質的に無理であり、継続・完了・経験が混ざり合っていると考えるのがよいと判断してはいるが、教科書では、それぞれにひとつのセクションを割いて説明をしている。

<関係代名詞>

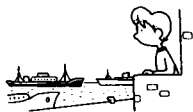
関係代名詞の導入は that からとした。that は先行詞が人にも物にも使えるという利点があり、使用範囲が広い。また格変化もないので、学習者の負担は少ない。そこで最初に that で関係代名詞に慣れてもらってから、その他の関係代名詞 who, which を導入している。

#### 4. おわりに

全体として、どんな授業パターンにも対応できる構成を目指した。生意気なことをいわせてもらえば、授業パターンをお持ちでない先生方には、どう扱ったらよいか悩まれることもあるかもしれない。このような場合には『Teacher's Manual』を参考にさせていただきたい。『Teacher's Manual 授業案集』では、いくつかの例を示している。そこから最適と思われるパターンを選び、これにあてはめたり、組み合わせたりして授業を構成されることをお奨めする。「生きる力」を育て「考える力」を養うことが、NEW CROWN の普遍的課題である。『Teacher's Manual』には、いろいろな情報が詰まっている。ご活用いただければ幸いです。

言語材料を中心に教科書について述べたが、先生方が利用する場合の参考になればと思う。もし、お会いする機会があれば、先生の授業の形について是非教えていただきたい。どんな授業パターンにも合う教科書を作っていきたいから。

### 現在完了形



I have lived in Yokohama for two years.  
「横浜に2年間住んでいます。」 [継続]



I have just finished my homework.  
「宿題を今終わったところです。」 [完了]



I have visited Hiroshima twice.  
「広島を2度訪れたことがあります。」 [経験]

過去に始まって現在に  
まで関係しているよ。



# 特集「英語教育はどうあるべきか」 Part 2

## 『ニュークラウン』を使った授業の特色

津田 雅子

(東京都練馬区立開進第二中学校教諭)

### 1. はじめに

NEW CROWN を使い始めて3年目になる。それまでは、題材内容を深く掘り下げ、考えさせるというような授業展開は難しい状況にあったが、使用教科書が NEW CROWN にかわって以来、「ことばの意義」「異文化理解」「人間の生き方」などについて生徒に問いかけをすることが多くなった。それは、これらが NEW CROWN の3つの理念であり、教科書づくりの根幹をなしているからにほかならない。

本稿では、3年生、7課 A Vulture and a Child を取り上げて、これらの観点を意識した授業展開を考えてみたい。

### 2. A Vulture and a Child の内容

この課のねらいは、次の3点である。

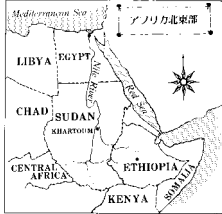
- 1) スーダンという国を知り、アフリカの飢餓と子どもが置かれた現状について考える。
- 2) 一枚の報道写真を通して、人道(ヒューマニズム)と報道のあり方について考える。
- 3) ひとつの話題について賛否両方の立場から討論する方法を学ぶ。

これらのねらいを見ればわかるように、この課は NEW CROWN の3大理念「人間教育」「異文化理解教育」「ことばの教育」すべてを扱っている教材である。アフリカの北東部に位置するスーダン共和国を取り上げており、セクション1でスーダンの紹介、セクション2で Kevin Carter が写真を撮る状況からピュリツァ

**LESSON 7 A Vulture and a Child**  
アフリカのスーダン共和国で、あるフリーカメラマンが撮影した1枚の写真が全世界に大きな衝撃をもたらした。

□ The Sudan is a country in the northeast of Africa. It is the largest country in Africa. About 26 million people live there.


In 1993 people in the Sudan were suffering from war and hunger. Kevin Carter went there and worked as a photographer. He wanted the world to know the facts. It was his job.



1. How many people live in the Sudan?  
 2. What did Kevin Carter do in the Sudan?  
 He **wanted** to take a picture.  
 He **wanted me** to take a picture.

northeast [nɔ:ð'ist]	million [mɪljən]	suffer [sʌfə]	war [wɔ:]	hunger [hʌŋgə]	photographer [fə'tɒgrəfə]
vulture [vʌltʃə]	the Sudan スーダン [sʊ'dæn]	Africa アフリカ [ə'frɪkə]	Kevin Carter ケビン・カーター [kə'vɪn kɑ:tə]	(Aの8画)	

suffer from ~



□ One day while he was walking around, he saw a horrible scene. A vulture was waiting for a child to die. He pressed the shutter. This is the photo.

He asked an editor to print it. Soon it appeared in newspapers all over the world. This photo made him famous. He won a Pulitzer Prize for it.

1. One day Kevin Carter took a picture of a vulture. What was it doing?  
 2. Where did his photo appear?  
 He **was famous**.  
 This photo **made him famous**.

horrible [hɒrəbəl]	scene [si:n]	press [pres]	shutter [ʃʌtə]	photo [fəʊtəʊ]	editor [edɪtə]	appear [ə'piə]
newspaper [nju:z'peɪpə]	famous [fə'meɪs]	Pulitzer Prize プリッツァー賞 [pʊlɪtəzə'praɪz]				

54 ● fifty-four fifty-five ● 55

一賞を受賞するまで、セクション3では写真に対するふたつの考え方を紹介している。

### 3. 指導にあたっての注意事項

この課において教師が心がけたいことは、生徒に考える時間を十分に与えることである。通常、授業では主に言語材料の習得やコミュニケーション活動に力点が置かれ、題材内容についての「考える活動」は二の次になりがちである。しかし一般的に「最近の子どもは感動しない。考えを表さない」などといわれる昨今、おとなであり教師である私たちが子どもたちに「問いかける」ことの必要性は、より高まってきているといえる。何かを感じてほしい、そして感じた何かを大切に自分の考えをまとめ、発表できるようにしてほしい。そのためには前提として、この課のように子どもたちの感性を揺さぶり、考えるきっかけになりうる題材と、十分な時間が必要であると思う。

### 4. ピクチャーカード・Q&Aで題材の深化を

NEW CROWNの編集委員の一人である齋藤栄二先生が本誌42号で、「本当のコミュニケーションの力を伸ばすには考える力は欠かせない」考える力を伸ばすためには、考えさせる要素をもった題材を準備しなければならない」と書かれている。この3年7課はまさにその考えさせる要素をもった題材である。「ハゲワシと少女」の写真を教師が何も語らず、生徒の前に提示するだけでも生徒に与える影響は大きいと思う。以下、私が実践したこの課の導入を示す。

- 1) 「ハゲワシと少女」のピクチャーカード(写真)を提示する。
- 2) ピクチャーカードについて英語でたずね、写真について考えさせる。

*T* : What's this?  
*S<sub>1</sub>* : It's a child.  
*T* : Yes. It's a child. It's a girl. What's this?  
*S<sub>2</sub>* : It's a bird.  
*T* : Right. It's a kind of bird. Its name is a vulture, hagewashi in Japanese. How do you feel about this picture? Please think.
- 3) 生徒の答えを引き出す。

*S<sub>3</sub>* : The girl is very small.  
*S<sub>4</sub>* : 子どもが痩せている。

*T* : Yes, she is thin.

*S<sub>5</sub>* : I'm sad.

*S<sub>6</sub>* : I'm not happy to see it.

*T* : What is this vulture doing here?

*S<sub>7</sub>* : It is trying to attack the girl.

*T* : Why doesn't the girl run away?

*S<sub>8</sub>* : Because she can't move.

*T* : Why can't she move?

*S<sub>9</sub>* : Because she is hungry.

*T* : Yes. You are right. What do you think about this photo?

*S<sub>10</sub>* : I think it's very shocking.

4) CDを聞かせ、課全体の内容を把握させる。

5) 聞き取った内容について fact finding をさせる。

fact findingとは齋藤先生が紹介されている機械的な応答であるが、生徒のコミュニケーション能力を高めるために、普段から英語で聞き、答える exercise を行いたい。そのためには、脚注のQ&Aが利用できる。セクションごとに2つ程度の簡単な問いではあるが、fact findingの exerciseには有効といえる。

また、レッスンの終了後には、本文の最後にある生徒への問いかけ“ What do you think? ”について考えさせたい。これは、Personal Involvementな exerciseになる。平成14年度からの新学習指導要領で謳われている「自ら考える力」を養うために、Kevin Carterのとった行動について考え、それをまとめ、発表することを目的としたい。私の授業では、まず、I support Kevin Carter. か、I don't support Kevin Carter. のいずれかを選ばせ、そのように考える理由を2~3文で説明するよう求めた。自由に英語で表現するのは難しいので、本文中の文を使ったり、それに追加していくかたちで表現させた。

生徒の表現例

• I support him.

Because his photo focused the world's attention on the Sudan. If he didn't take a picture, the Sudan's facts weren't known by people all over the world.

• I support him.

I think his photo is very important. His photo helped many other starving Sudanese. It will be able to help many people from now.

• I don't support him.

I think that taking pictures is good. But I think saving the

child is more important.

- I don't support him.

Because I think he had to help the children before he took the photo.

A Vulture and a Child は切り込みの鋭い題材であるが、それだけに生徒たちはそのメッセージを自分のものとして把握することができるものと思う。

### 5. 言語材料をわかりやすく理解・運用させる





コミュニケーションの基本になるのは語彙や文型・文法である。NEW CROWN は言語材料の配列についても十分な配慮がなされている。

この課ではセクション1で<主語 + want + 目的語 + to + 動詞の原形> , セクション2で<主語 + 動詞 + 目的語 + 補語(形容詞)> , セクション3で現在分詞, 過去分詞の前置修飾と並んでいる。既習の内容から新しい文型・文法を導入し, 生徒の気づきを大切にしたい。たとえばセクション1では, He wanted to take a picture. の表現を使って, He wanted me to take a picture. を引き出す。多くの生徒は<want to ~> が「~したい」の意味であることを知っているので, 間に me が入ることで何らかの変化が生じるであろうことに気づく。その気づきを大切に指導をする。教師は「What kind of differences are between the two sentences? Think about it.」と生徒に質問する。予習をしている生徒もいるので答えはすぐに出てくるであろうが, 教師がただ説明するのではなく, まずは生徒が自ら考える時間を与えることが大切である。

導入後は練習の時間となる。NEW CROWN では, TRY&CHECK(各 LESSON 末の練習問題)で学習した言語材料の定着を図ることができる。この段階の練習では, 生徒が混乱するような問題ではなく, 簡単な問題が望ましい。私は, 各セクションごとに授業を展開することが多く, 新しい言語材料の提示後に TRY&CHECK を活用している。「絵を見ながら, 例にならって言ってみよう」「友だちと対話をしてみよう」などは, ペアワークやグループワークで取り組ませる。教師は, 教室をまわりながら生徒のようすを把握し, その後クラス全体で練習したりということもある。また, 問題の中に2(5)のように, 自分で考えた語を使って表現させるようなものもあ

**TRY&CHECK** 7

**1** 絵を見ながら, 例にならって文を完成しよう。□

(例) 	(1) 	(2) 	(3) 
open the window	wash the dishes	go to bed	be a teacher

(例) It was very hot. Our teacher asked me to open the window.







(1) My mother was very busy yesterday. She asked me \_\_\_\_\_.

(2) It is 12:30 at night. My mother will tell me \_\_\_\_\_.

(3) I want to be a doctor in the future. But my father and mother want me \_\_\_\_\_.

**2** 例にならって, 左の語と右の絵をもとにして友だちと対話してみよう。(5)の( )には適当な語を入れて言ってみよう。②

(例) (angry — the news)  
A: You look angry. Why?  
B: The news made me angry.

(1) angry			
(2) sad	the movie	the music	his words
(3) happy			
(4) warm	the katabi	the news	the book
(5) ( )			

fifty-seven • 57

Book 3, LESSON 7 練習問題

り, 生徒の独自性や発想力を育成する上で有効である。

### 6. 言語活動を楽しく実践的に行う

生徒がことばを使ってみたいと思う状況を作り出すことはまさに教師の Creativity のひとつである。この課でも生徒の興味・関心をひく身近なテーマでことばを使用する場面を設定することができる。たとえば, TRY&CHECK の1を発展させ, 「私が家族に頼みたいこと, 望んでいること」などのテーマを与え, それについて発表させる。すぐに speaking できない生徒がいる場合は, ノートに書かせてもよい。教科書という材料を上手に料理する方法を教師自らが考え, 工夫し, より効果的な独自の指導を実践したいものである。

# *The New Crown Puzzle*

Thomas Hardy [Professor, Tamagawa University]

Over the years I have been involved with the team of people writing New Crown, I have found the process, in turn, stimulating, infuriating, and fascinating, but always absorbing. The emotions it evokes are similar to those I have when putting together a jigsaw puzzle. Putting a puzzle together requires strategies in finding shapes that fit and colors that match. Writing New Crown required similar puzzleish strategies.

One basic puzzling strategy is sorting the pieces into related colors. This might be compared to the process of creating a curriculum. There are the blue pieces — the sounds that need to be introduced and in this order. These are the white pieces — minimal vocabulary required by Monbu (kagaku) sho, the vocabulary thought important by New Crown writers, editors, and teachers, and the vocabulary required by the topic. Here is the pile of green pieces — the grammatical and structural items that need to be introduced. Finally, here are the brown pieces — the functional phrases that are necessary for daily communicating about basic topics and in common life situations.

Another basic puzzling strategy is to do the easy parts first, in particular the outside frame. In the New Crown puzzle, this is similar to writing the first draft. This process is actually quite fun. It goes quite quickly, and there is a sharp sense of accomplishment. “It’s done.” The sky is at the top, the earth is at the bottom, and trees and clouds line the edges. Well, not quite done. In fact, the entire center is empty.

The final strategy is piecing the center together. Start with a group of colors that seem to go together — for example the blues of what might be the sky. This is a harder, more painstaking process of carefully looking, comparing, trying, and changing. In the puzzling that went into writing New Crown, this process is the second, and third and thirty-first drafts

of the texts. The process covers all aspects of English.

In one section the goal might be to introduce students to the sounds of the plural “-s.” In the course of the passage, first we have to find words that naturally occur in the context. Also we can only use words that have already appeared in earlier lessons. Finally, the words must expose students to all three basic final “-s.” sounds, /-s/, /-z/, and /-es/.

Vocabulary and grammar are the most difficult of the language aspects to put together. The conditions surrounding them are rigid and every change in one section requires adjustments in the all following sections.

Regarding vocabulary. Monbu (kagaku) sho mandated words must be included. The short list of New Crown words (based on teacher comments and editorial thinking) must be included, and another list of preferred words should be included. Only words that would occur naturally in the context are allowed. A maximum of eight new words per page is ideal. All this, and a upper limit on the total number of words in the three volumes.

Regarding grammar, the goal might be the simple past, /-ed/, as in “she looked” and “he played.” I came to find out that the past might be simple but the writing was not. First, no irregular verbs are allowed. Unfortunately, these are the main work-a-day verbs of English. Second, only words that had already been learned in the present tense. Fair enough. But this latter condition takes us back to the ever changing vocabulary.

As the text emerges, as draft after draft after draft comes out, the words keep changing, which means all following chapters change and the English puzzle changes.

All in all, the New Crown puzzle is an invigorating process. One that is occasionally infuriating. One that is always a challenge.